

【 ひろがり 】

4月1日に日本障がい者サッカー連盟設立 (<http://www.jiff.football/>) プレス発表が行われ日本サッカー協会との連携が多くの方々を知ってもらえました。JIFFとは、Japan Inclusive Football Federationで、Inclusive (インクルーシブ)とは包括するという概念、つまり何者をも排除しないということでもあります。ろう者サッカーに携わり始めた10年前までは自分自身もデフサッカーや他の障がい者サッカーの存在自体も知らずにおりました。いろんな方々のお力添えで7つの障がい者団体が連携する形になりました。その中で特にお二人の働きがデフサッカー認知度向上に関しまして大きかったと思っております。

「中島幸則」氏は筑波技術大学准教授をされております。2000年U-17サッカー日本代表チームに帯同され、その後は聴覚障害者スポーツに関わられ、代表チームにアスレチックトレーナーを派遣してくださっております。2009年にはデフリンピック日本選手団本部トレーナーとしても帯同されています。10年以上前から日本サッカー協会との連携をいろんな所で発信し続けてくださっております。

参考資料

http://www.tsukuba-tech.ac.jp/repo/dspace/bitstream/10460/1162/7/Tec20_2_10.pdf

「中村和彦」氏は映画監督として、知的障がい者サッカー日本代表を追った「プライド in ブルー」、台北デフヒンピックに出場した「ろう者サッカー女子日本代表」を描いた「アイコンタクト」、Jリーグ後援映画「MARCH」や日本代表激闘録シリーズなどサッカー関係 DVD も手掛けられています。障がい者サッカー7 競技を紹介した映像も制作されました。日本でもっとも障がい者サッカー全般に精通していると言っても過言ではなく 10 年以上前から多くの団体と親交があり、横のつながりを取り持ってくださいました。今回の日本障がい者サッカー連盟発足の、ひとつのきっかけにもなられております。

参考資料 <http://blog.goo.ne.jp/kazuhiko-nakamura>

東京で 2020 年に開催される 4 年に一度行われるオリンピック、パラリンピックはご存知の方も多いと思います。同じく 4 年に一度行われる聴覚障害者のための総合スポーツ競技大会が、デフリンピックです。2007 年に内閣府が実施した調査によると、デフリンピックを耳にしたことがある人はわずか 2.8% でした。デフリンピックの歴史は 1924 年からの開催です。パラリンピ

ックは1960年です。聞き慣れないのは、2001年まで「デフリンピック」ではなく、「世界ろう者競技大会」という名称でオリンピックの翌年に開催されていた為です。知名度が低いことの弊害によりスポンサーが集まらない、お金が集まらない、遠征などを自己負担で担わなければならないことだけではなく、遠征や試合のために学校や仕事において休暇を取り辛いこともあります。そうしたことから「オリンピックに出場します」と言えば、「おめでとう！」と全力で応援されますが、「デフリンピックに出場します」と言っても、「それは何ですか???'となるでしょう。次回は2017年にトルコで開催予定です。

第2回 JDFA フェスティバル2016が2016年3月12日（土）-3月13日（日）に兵庫県にて開催されました。子どもから大人までと幅広い年齢の方々に1500名（第1回は500名）のご来場があり、今回はデフサッカーだけでなくアンプティサッカーとブラインドサッカー体験も行いその他障がい者スポーツの体験会、なでしこ交流戦、少年交流戦、映画「アイコンタクト」上映会、中村和彦映画監督トークショー、ダウン症の画家宇田光志氏の絵画展、障がい者作成作品の販売、JAM

「<https://www.facebook.com/usn.jam/>」つながりでチームWebの車椅子でのサッカー、NPO 法人レックス体操クラブのチアリーディング、infini∞の

生演奏、For Lifelong Style のメディカルサポート、「竹内」選手出身チームのボアソルテ美都のご協力によりバブルサッカー体験などが行われ、参加者に佐用町による「豚汁750人前無料配布」、兵庫県による「水無料配布」がありました。

「心が変われば態度が変わる 態度が変われば行動が変わる 行動が変われば習慣が変わる 習慣が変われば人格が変わる 人格が変われば運命が変わる 運命が変われば人生が変わる」という言葉があります。代表合宿時、朝の清掃活動で嬉しいことは何も言わなくても自然にできているところです。繰り返し行うことによって習慣化してきています。誰かがに見られているからするのではなく、自分の心を磨くためでもあります。そうした意識を持たずに適当にゴミ拾いを行っていた選手はだんだんと代表に選ばれなくなってきております。これが選考基準ではないのですが、少しのことを一生懸命にできない選手は、練習や試合でもいい加減なところがあり味方からも信頼されないのではないのでしょうか。日本ろう者代表に選ばれましたら自分のサッカー活動だけでなく地域の大会、キッズサッカー教室やイベントに積極的に参加してほしい、ゴミ拾いなどの活動を広げてほしいと「来た時よりもきれいにすることをモットーに」思っております。第1線を退いても継続して普及活動や協会のサポートを続けてほしいし、また代表に選ばれるということはその責任・義務があり

ます。選手を引退して活動を終わりにしてほしくないのです。たくさんの方々から応援を頂いているので、元代表選手も含んだすべての代表選手には今以上に率先して出来ることからコツコツと活動して行ってほしいと願っております。このことは、ろう者とふれあうことの少ない方に少しでも知ってもらう為ですし、こういったことの積み重ねが選手自身、協会への支援・力となっていきますので、協会やろう者の子どもたちの将来のために自分に何ができるかを考えて継続して活動を行い、実際に足を運ぶことによって触れ合いながら知ってもらっていくことがろう者（聴覚障がい者）のことを知ってもらう上で一番大切です。

多くの人は、手話とは単に日本語の音声を手のサインに置き換えたものと考えていますが、手話はれっきとした自然言語であり、その誕生は音声言語と同様に古いです。手話に関する最古の記録は4世紀以前に書かれたユダヤ教の律法書に確認でき、世界各地で独自の発展を遂げてきました。もちろん細かい文法や語彙もあり、それを習得することで、哲学や心理学なども含めこの世の森羅万象を語ることもできます。日本には日本手話が、アメリカにはアメリカ手話があり、世界各国の手話のほかに「方言」も存在しています。「手話とは、日本語の音声を手のサインに置き換えただけのものだ」と健常者が誤解するには理由があります。実は、私たちがテレビなどで目にする手話は、「日本語

対応手話」と呼ばれ、実際のろう者が使う「日本手話」とは別物だからです。手話は手だけで表すものと思われがちですが、実際は手の動きに加え、表情や目線、眉の上げ下げや一瞬の間など細かい要素から成り立っています。耳の聞こえないろう者は、聴覚の代わりに視覚が発達しているため、それらの細かい形容詞や時制の変化を読み取れますが、音声情報に多くを頼りがちな聴者には読み取るのが難しいです。

